

箱庭制作における「違和感」への関わり

東海林優希 (松浜病院)

キーワード：箱庭制作、「違和感」、主観的体験

Participation with “a sense of incongruity” in sandplay therapy

Yuki TOUKAIRIN (MATSUHAMA Hospital)

Key words : sandplay therapy, “a sense of incongruity”, subjective experience

I. 問題

箱庭療法とは、Lowenfeld,M.の世界技法をもとに、Kalff,D.が完成させた、多数のミニチュアの中から自由に選び、砂の入った箱の中に置いていくという心理臨床技法である。Kalff,D (1972)によると、箱庭療法において制作者は、見守り手との「母子一体性」を帯びた関係を基盤に、内的な感覚と向きあい、象徴的に自己を表現していくとされる。制作者が主観的に体験する内的感覚のうち、本論では制作者の「違和感」に焦点をあててみたい。

「違和感」とは、「からだの調和が破れること、転じて、他のものとしっくりこないこと (広辞苑第5版)」を指す。箱庭制作において、制作者は思い描いたイメージに合うミニチュアがないことへの「違和感」や、箱の中の配置にしっくりこないことへの「違和感」など、さまざまな「違和感」と向き合い調整していくプロセスを体験していると考えられる。また、そのプロセスを通じて「違和感」自体も常に動いていくものと想定される。本論では、この「違和感」を、「箱庭を制作する際に制作者が体験する、ちぐはぐでしっくりこない感覚」と定義し検討していく。

片畑 (2005) は、箱庭制作における制作者の主観的体験を「身体感覚」の観点から検討し、イメージしている段階におけるより未分化で主観的な「身体感覚」は、実際に砂箱にミニチュアを置く段階において、「触覚」や「視覚」のような分化した五感の知覚によって修正されていくことを明らかにして

いる。同様に、制作者の主観的体験である「違和感」は、それ自体が制作過程を通して常に動いていくものと言えるであろう。

「違和感」とは誰が何に対して抱く感覚であるのか。伊藤 (2001) は心理面接における『発話者としての〈私〉』に関する論考において、その主体と対象について論じている。そこで伊藤が『発話者としての〈私〉』は、同時に、主体の分裂、すなわち、言表内容 (=対象) としての〈私〉からの、言表行為者 (=存在) である〈私〉の疎外を伴っている」と述べるように、箱庭制作においても、『制作者としての〈私〉』は、内容 (=対象) としての〈私〉、すなわち現前する箱庭作品からの、制作行為者としての〈私〉の分裂を伴う。「違和感」とは、制作行為者としての〈私〉が、分裂した作品内容 (=対象) としての〈私〉に相対するときに生じてくる感覚であるとするならば、〈私〉は制作プロセスを通して、この「違和感」にどのように関わっていくのだろうか。

本論では、制作行為者としての〈私〉の「違和感」への関わりを検討し、さらにそのような「違和感」との関わりが、箱庭制作においてどのような意味を持ち得るのか考察していく。そのため、箱庭制作における「違和感」への関わりを制作者の体験の語りの中から抽出し、実証的な方法でその構造を仮説的に提示することを目的とする。

II. 方法

調査協力者（以下、制作者）：大学生20名（男性2名、女性18名）以下、男性制作者をM1・2、女性制作者をF1～F18と表記する。

調査者：すべての調査における見守りおよび面接を筆者が行った。

調査場所および材料：調査は大学付属の相談室一室を使用し、そこに設置されている箱庭療法のための内側が青く塗られた砂箱（縦×横×高さ 57×72×7cm）、ミニチュア（人・動物・建物など）を用いた。その他、SD法質問紙、ビデオカメラおよび三脚、ICレコーダーを使用した。

手続き：

- 1：箱庭制作：ビデオカメラとICレコーダーの記録の取り扱いについて説明し同意を得た後、箱庭制作へ導入した。〈柵に並んでいるミニチュアの中から3個を使って、砂箱の中に置いてください。箱の中の砂は、自由に使うことができます。制限時間などは特にありませんので納得のいくまで取り組んでください〉との指示により制作を開始した。制作の様子は、面接室の隅に固定したビデオカメラで撮影した。
- 2：インタビュー①（制作体験の振り返り）：制作の過程を撮影したビデオ動画を筆者と同時に見ながら、3個のミニチュアを置いたそれぞれの時点で、どのようなことを感じていたか、制作行為者としての〈私〉の視点から主観的な体験を語ってもらった。〈このアイテムを選んで置いたとき、どのようなことを感じていましたか〉という質問から始め、制作者の語りを妨害・操作しないよう留意しながら、適宜質問を加えた。インタビュー内容は、ICレコーダーで記録した。
- 3：妨害課題：自分が制作した箱庭を「作品」として意識させるため、また次のインタビュー②において制作体験やインタビュー①の体験から切り離して語ってもらうために、自身の作品を絵または図として記録する作業を妨害課題として課した。
- 4：インタビュー②（作品への印象）：作品の写真を制作者に呈示し、制作行為者としての〈私〉から切り離れた、作品内容（＝対象）としての〈私〉に対する語りを求めた。〈改めて作品を見て思うことはありますか〉という質問から、

作品について思うことや印象など自由に語ってもらった。

結果の分析

インタビュー①・②で得られた面接記録を逐語化したものをデータとし、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（木下2003）に準ずる方法で、制作者の「違和感」に関わる体験について質的な分析を行った。

具体的な手法としては、まず「箱庭制作における違和感への関わり」を分析テーマとして設定した。筆者がインタビュー内容を読み込み、それぞれの制作者が「違和感」へと関わっている具体的な箇所をヴァリエーションとして収集した。ある程度の数の類似した具体例がヴァリエーションとして収集されたところで、各ヴァリエーションを説明できる概念名を考え、分析ワークシートを作成した。その際、ヴァリエーションを追加する作業と同時並行的に、対極例について比較検討することで、解釈に恣意的な偏りが起こらないよう配慮した。概念生成を繰り返す中で、概念同士まとめられそうなものは、1つの概念にまとめた。新たな概念が生成されなくなり、結果のまとまりにある程度安定性があると判断したところで、理論的飽和化として分析を終了した。

III. 結果 ①

インタビュー内容の分析から、箱庭制作における「違和感」への関わりとして、10の概念が抽出された。以下、カテゴリーごとに抽出された10の概念について述べる。「斜体」：制作者の言葉、『 』：ミニチュアの名称、【 】：概念名、《 》：カテゴリーとして表記する。

《環界へと向かう関わり》

A. 【見栄えを整える】

F7は『木』を置く際、片面の実が1つとれてしまっていることに「違和感」を覚え、正面と決めたカメラ側から、実のとれている箇所が隠れるよう工夫して配置した。またF6は、はじめ『ヘビ』に関心を向けるが、「でもな～もって可愛いやつ選ばうと思って」と、『ヘビ』を選ぶことはなかった。このように、作品の見ための「違和感」に対して、見栄えを整えようとする関わりである。

B. 【合理性を忠実に再現する】

F12がミニチュアを選択する際に参照にしたの

は、「ゾウは砂漠にはいない。もっと植物のあるところにいるはずだ」という知識であった。また、F1は「そこはすごく現実味を帯びてました。橋の横幅より川が出ちゃうと（橋が）沈んじゃう」と語っており、川幅が『橋』のサイズに合うように砂を調整した。合理性を考え、矛盾が生じないよう配慮する関わりである。

C. 【イメージに合わせてモノを調節する】

「アットホームなイメージは絶対に変えないつもりで、どうアットホーム感を出すか考えました」（F10）など、内界に思い描くイメージと外界に具現化されたモノとの「違和感」を解消するために、内界のイメージに合うミニチュアを選択し、また砂箱の中でその配置を調整するという関わりである。この場合に制作者が調整を施すモノとは、ほとんどがミニチュアを指している。砂のような思い通りに形を保つことができないものや、あらかじめ規定されていて手を加えることが許されない砂箱などは、その対象に含まれない。

D. 【避ける】

F3ははじめ『クマ』を探していたが、棚に並ぶ『クマ』は「歯剥き出してたりして怖い」ことからそのモノ自体を【避ける】という対応をしている。他にも「嫌だ」「気持ち悪い」など、直観的に感じられた「違和感」を【避ける】ことで、それには関わらないという関わりである。この概念は、特にミニチュアの表情についての語りから、多くのヴァリエーションが抽出された。

《内界へ向かう関わり》

E. 【わからないものに近づく】

「違和感」を、〈私〉にとって新鮮な、興味を魅かれるものとして受け取り、接近していく関わりである。F4は、「何だかわからない」「中から音がした」「『オルゴール』を選んだ理由として、「わからないものに期待する感じ」「（砂箱に置いたら）どんな音が鳴るかなってわくわくする」と述べている。好奇心や期待をもって、自ら積極的に「違和感」に接近する関わりである。

F. 【妥協して引き受ける】

具体的な制限として意識される「違和感」に対して、妥協して引き受けようとする関わりである。「アリスが浮かんできて、そういうのになくなって思ったんですけど、見つからなかったんでとりあえず（笑）（F14）」といった欲しいミニチュアがないという「違和感」への妥協や、

「（底の青が）ばっと出てくるのかと思ったら、砂が残っちゃうし、さらさらすぎるゆえに、思い描いたようにはいかなかった（F18）」といった砂が思う形に留まらないという「違和感」への妥協が多く、制作者によって語られた。

G. 【モノに合わせてイメージが変容する】

F4は『新郎新婦』が歩いていく一本道をイメージして、砂をかきわけていくが、思うようにならない砂への「違和感」と関わるうちに、「もしかしたら期待するような音じゃなかったり、すごい嫌な音がしたりするかもしれない」と、『オルゴール』に対するイメージが変容し、「実はまっすぐ進むのはなんか違うんじゃないか」と、砂でつけた道に手を加える。このように、実際にミニチュアを砂箱の中に置いてみたり、砂を触ってみたりする間に生じた「違和感」から、内界のイメージに変化が生じることがある。

H. 【後悔や驚き、寂しさとして感じる】

対象として自身の作品を振り返ったときにも「違和感」は生じる。普段の趣向とは異なるモノ、色合いを選んでいくことに、制作後になって気づき驚きを語ったり（M1）、「目標に向かうとか、向上心溢れるような、エネルギー的なものを作ったはずなのに写真にしたらあれ?って。物足りなさの方が強い。（F1）」「抜け殻みたい。作っている最中はすごい気分が上昇したけど、改めてみると食べ終わった皿を見ているみたい（M2）」など、「違和感」を後悔や驚き、寂しさといった自身の感情として体験する関わりである。作品（＝対象）への語りを得ることを意図して、写真を用いて行ったインタビュー②段階で多く語られた。

I. 【意味づける】

「違和感」に意味や解釈を与えることでおさめようとする関わりである。F3は、インタビュー②段階において、「絵的にすっきりしないというか、あれ?と思うような作品になった」と自分の作品を振り返ったあとで、「でも自分のまとめられない、1つに絞れない性格が良く出ているのかな」と、その「違和感」に解釈を与えている。

《〈私〉の身体を通じた「違和感」との関わり》

J. 【身体感覚に照らしておさまるところを探す】

「均等過ぎて気持ち悪い」「落ち着かない」「居心地が悪い」「そわそわする」といった身体的な感覚として「違和感」を体験する関わりであ

る。また、「近くじゃない感じ (M2)」「自分がモノを見るときに、全体が捉えられる位置に置きたかった (F10)」というように、〈私〉からの距離や〈私〉の視点についての語りも多く抽出された。そこでは〈私〉の身体に対するミニチュアの配置が問題となっている。「どこが自分にとってしっくりくるか (F8)」「自分にとってのバランス」という言葉で、制作者としての〈私〉の身体的な感覚が語られた。この概念は、「あまり言い表せないんですけど (F12)」「よくわからないけど (M1)」というように、制作者本人にも捉えどころがなく言語化されにくい体験ではあるが、最も多くのヴァリエーションが抽出された関わりでもある。

IV. 考察 ①

Lacan J. (1949) は、鏡像段階における、違和感や共同運動の不能であらわになる〈原初的不調和〉を環界と内界との関係を変化させるものとして説明している。したがって、ここでは制作者の内界の世界を内界、それをとりまく外側の世界を環界として、それぞれの変化へとつながる「違和感」への関わりを考えてみたい。〈私〉を軸として、「違和感」への関わりが環界に向かうものと、内界に向かうものとに分けて考察し、図1.に示すような関わり構造

として検討する。

1. 《環界へと向かう関わり》

【A.見栄えを整える】【B.合理性を忠実に再現する】【C.イメージに合わせてモノを調節する】【D.避ける】関わりは、制作者としての〈私〉が、〈私〉を取り囲む外側の世界に注意を向け、砂やミニチュアといった外側にあるモノへと働きかける関わりである。そこで、この4つの概念を《環界へと向かう関わり》というカテゴリーでまとめる。

〈私〉をとりまく環界のうち、制作に大きな影響を及ぼすのが他者の存在である。とりわけ見守り手の存在は、個人を超えた一般的な他者を代表する存在として、制作者に意識される。制作者は、作品すなわち対象としての〈私〉が、他者からどのように見られるかという外側からの視点を意識して、そこで生じる「違和感」の具象性にこだわる。美的な感性に従って、【A.見栄えを整える】こともあれば、社会的に適切な表現であるか、他者に受け入れられやすい公共性を備えているかという基準に照らして【B.合理性を忠実に再現する】こともある。さらに本調査では、制作過程の記録のためにビデオカメラを用いた。多くの制作者がビデオカメラに映る位置を、作品の「正面」であると語っていることから、ビデオカメラの存在は「見られている」という感覚をいっそう賦活し、一般的な他者の視線を強く

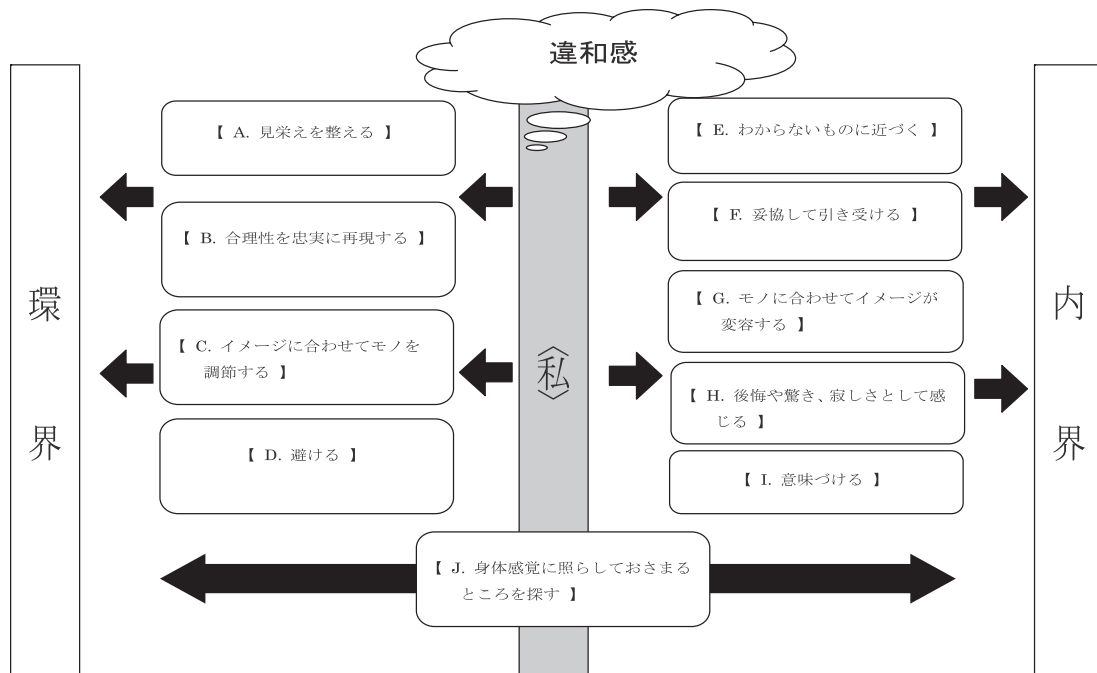


図1. 箱庭制作における「違和感」への関わり

意識させるものとして働いていたと考えられる。

制作者は、内界に生じる「違和感」をきっかけに環界へと意識を向け、環界にあるモノに能動的に関わることで修正していく。

2. 《内界へと向かう関わり》

【E.わからないものに近づく】、【F.妥協して引き受ける】、【G.モノに合わせてイメージが変容する】、【H.後悔や驚き、寂しさとして感じる】、【I.意味づける】関わりは、〈私〉の内界に変化や影響を及ぼすような関わりである。これら5つの概念を、《内界へと向かう関わり》というカテゴリーにまとめる。

F4はわからないという「違和感」をきっかけに、『箱』を手に取り砂箱に置いた後も、最後までフタを開けてその中を確かめることはなかった。このことから「違和感」は必ずしもすっきりと消えてなくなることが目指される感覚ではないことが考えられる。【E.わからないものに近づく】関わりのように、「違和感」が期待とともに受け入れられる場合もあれば、【F.妥協して引き受ける】関わりのように、現実的な制限の中でやむを得ず引き受けなければならない場合もある。また、得体の知れなさや不気味さを伴いながらも、未知のものとの出会いとしてポジティブに体験されることもあるだろう。さらに、【G.モノに合わせてイメージが変容する】関わりのように、「違和感」をきっかけとしてイメージの変容に気付くことがある。自律的に動くイメージに身を委ねるなかで、これまで意識してこなかった〈私〉の一面に気づくとき、自身の「違和感」もまた変化していくのである。

【H.後悔や驚き、寂しさとして感じる】 【I.意味づ

ける】関わりは、「違和感」から距離をとって客観的に眺めるときに生じる関わりである。制作者としての〈私〉が、その体験を離れて作品内容（＝対象）としての〈私〉を眺めるとき、その「違和感」は後悔や驚き、寂しさとして体験される。また、そのときに生じた「違和感」に対して、能動的に関わろうとするときには【I.意味づける】という関わりが生じる。〈私〉がこのような表現をしたのはなぜだったのか、自分のどのような特性が表れているのかなど考えるなど、知性化の防衛機制によって自身の「違和感」に関わろうとするあり方とも言えるかもしれない。

3. 《〈私〉の身体を通じた「違和感」との関わり》

身体は〈私〉の内界と環界の間に位置することから、制作者は、この身体を軸に環界と内界を往復し折り合いをつける作業に取り組んでいると考えられる。制作者は、このような作業の中で、内界と環界の齟齬である「違和感」を、まさに身体でもって体験し、その感覚を手掛かりに制作を進めていく。

V. 結果②

ここまで、身体を軸として環界と内界の両方向へ向かう「違和感」との関わりについて考察してきたが、これらは互いに複雑に絡み合い、制作過程をとおして「違和感」それ自体が変化していくことが考えられる。そこで次に、ある制作者（F13、以下Aさんと表記する）の制作過程（図2.）を「違和感」への関わりという軸に沿って追いつながりながら、その動きを検討してみたい。


<p>F13の制作過程（ビデオ記録より）</p> <p>時間</p> <p>迷っている様子で、植物の棚 人物の棚 家の棚などを往復しながら見てまわる</p> <p>2:02 ~ 複数の建物が並ぶ棚を眺めながらしばらく考えた後『家』を選ぶ。箱庭中央にボンと置く・・・①</p> <p>3:07 ~ 動物の棚を一通り眺め『ヒツジ』を手に取り『家』に向かう向きに整えて置く・・・②</p> <p>『鳥』『猫』『犬』『キリン』などの動物の前で立ち止まり、じっと考えているが手に取る様子はない。</p> <p>5:00 ~ 『ライオン』を取り、「家」に顔が向く方向で置き、終了を告げる。・・・③</p>	
--	--

図2. F13の制作過程

《環界へと向かう関わり》

Aははじめ、ミニチュアには触れることをせず、全ての棚をじっくり見て廻った。このときのことをAは「たくさんあり過ぎて迷った」と語っている。それから「自分のイメージの中の“自然”と調和しそうな家」を選び、「広い森の中にボンとあるイメージ」と迷わず箱庭の真ん中に置いた（【C.イメージに合わせてモノを調節する】）。また、このとき「この動物何だろう…ってというのがいくつかあって、自分がぱっとわかる動物を置こうと思った」というように「わからない」という「違和感」に対しては【D.避ける】関わりをとる。

その後も【C.イメージに合わせてモノを調節する】関わりで、「森の中」のイメージに合う『鳥』を探すが、このとき「鳥のサイズを見ていると、明らかヒツジよりもおっきい」ことに気づく。ヒツジよりも鳥が大きいのはおかしいという「違和感」から、【B.合理性を忠実に再現する】ため、『鳥』を除外した。

《内界へと向かう関わり》

「森の中にもおかしくないものを選んでいたんですけど、大きさのこととか考えていたら、全く違うモノがいてもいいんじゃないかと思い『ライオン』に辿り着きました」と、【F.妥協して引き受ける】関わりで『ライオン』を選ぶ。

そして「ライオンだけは、まったく森の中にはないだろうと思うモノです」「サイズとしてはまったく「違和感」はないけど、さっきまでのイメージはどこに行っただろうっていうくらい、これまでのイメージとは違うものになりました」とイメージの変容を語っている（【G.モノに合わせてイメージが変容する】）。さらに見守り手とともに作品を写真で眺めながら行ったインタビュー②では「こう改めてみると、『ライオン』が『ヒツジ』を狙っているような、ちょっとまた違うイメージになっている」と語った。

Aは最後に「人から見たら「違和感」とかあるかもしれないけど、これでよかったんじゃないかな、自分らしいなと思います」と「違和感」をおさめ面接を終えている。

VI. 考察②

はじめて箱庭制作を行ったAにとって、ズラリと並ぶ多様なフィギュアや砂箱は、新鮮で異質なモノであ

り、さらに初対面の見守り手の前で何かを表現しなければならないという状況そのものが「違和感」を伴う体験であったことが想像される。そこで、まずAは「森の中」「自然」というイメージを設定して【C.イメージに合わせてモノを調節する】、「わからない」ものを【D.避ける】ことで関わる対象を限定するといったやり方で「違和感」へと関わる。これらは《環界へと向かう関わり》である。

そのような過程において、大きさの矛盾という「違和感」が生じ、それに対してAは【B.合理性を忠実に再現する】関わりを試み、「森の中」のイメージには異質な『ライオン』を【F.妥協して引き受ける】。この『ライオン』の登場が、【G.モノに合わせてイメージが変容する】ことを導いている。これは《内界へと向かう関わり》である。そして最後にAが「これでよかったんじゃないかな」と語っているように、そのような「違和感」との関わりを通して「違和感」自体が変化していく。

最後に「人から見たら「違和感」とかあるかもしれないけど、これでよかったんじゃないかな、自分らしいなと思います」とAは語っている。環界と内界とを往復し「違和感」と関わる箱庭制作のプロセスにおいて、Aが基準としていたのは自分らしいか否かであり、人からみたときの「違和感」ではなく〈私〉の内起こる「違和感」であることが重要であったと考えられる。

VII. 総合考察

箱庭制作を通じて〈私〉は「違和感」を手掛かりとして環界と内界を往復し、両者をすり合わせる作業に取り組んでいた。

箱庭を制作者の心的世界の象徴的表現として捉えるとき、主眼がおかれているのは《環界へと向かうかかわり》である。制作者は、見栄えや合理性といった外的なものに気を配りながら、内的なイメージに形を与える作業に取り組んでいた。東畑（2014）によると、「かたちづくること」は表面をもたらすことであり、「表面の生成によって、無意識の醜く不快なものは、現世的に形象化されて、取り扱えるものに変形される」。制作者は「違和感」を手がかりに、無意識に形を与えようと環界へ働きかける。

一方で、箱庭に用いられるミニチュアや砂は、それ自体が主体性をもって制作者を遊びへと誘い惹き

つける側面がある。河合（2002）は、箱庭制作について「最初は自分が考え、意図したように作っているのであるけれど、そのうちに自分の意図や意志を超えて、どうしても何かを置かざるを得なくなったり、あるいは作ろうと思っていたことができなくなる」と述べている。制作者は、〈私〉にとって違和的なものとの出会いをドキドキしながら迎え入れたり、あるいはやむを得ず引き受けることになったりと、さまざまに「違和感」と関わり、内界のイメージは変容していく。このようにして「違和感」自体もまた変化していくことが考えられる。

「違和感」とは、制作者が内界と環界を行き来する過程で体験する、両者が食い違っているという感覚である。「違和感」の主体である〈私〉は環界と内界の間に身体をもって存在している。制作者は、「違和感」を〈私〉の身体感覚として体験し、それを手がかりに内界と環界をつなぎあわせる作業に取り組んでいるのではないだろうか。

文献

- 後藤美佳（2003）：箱庭表現に伴う「びったり感」のPAC分析、『箱庭療法学研究』16(2)
- 石原宏（2008）：制作者の体験からみた箱庭療法の「治療的要因」に関する心理臨床学的研究 若手研究（B）研究成果報告書
- 伊藤良子（2001）：心理治療と転移－発話者としての〈私〉の生成の場 誠信書房
- Kalff D（1972）：カルフ箱庭療法 誠信書房
- 片畑真由美（2005）：臨床イメージにおける内的体験についての考察－箱庭制作体験における「身体感覚」の観点から－ 京都大学大学院教育学研究科紀要 第52号
- 河合隼雄（1969）：箱庭療法入門 誠信書房
- 河合俊雄（2002）：箱庭療法の理論的背景 現代のエスプリ 箱庭療法の現代的意義 至文堂pp.110-120
- 木下康仁（2003）：グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践 弘文堂
- 北山修（2007）：劇的な精神分析入門 みすず書房 214-216
- Lacan, J.（1949）：〈わたし〉の機能を形成するものとしての鏡像段階－精神分析の経験がわれわれに示すもの－ 宮本忠雄（訳）（1972）エクリ I 弘文堂 pp.123-133
- 東畑開人（2014）：「かたちづくること」の美的治療、『箱庭療法学研究』27(1)、3-15